

(翻訳) 大火事の翌朝

● メーヴ・ブレナン
(訳) 香山 はるの

私が5歳から18歳になる頃まで、うちの家族はラネラというダブリンの一地区にある小さな家で暮らしていた。この通りの家々は皆赤いレンガ造りで、コンクリートと芝が敷かれた小さい裏庭があった。低い石垣が隣の家との境になっていたが、最初に引っ越してきた時、私はまだ小さかったので、石垣の向こうを見ることはできなかった。でも、何年か経った後では難なく見られたような気がするので、5フィート位の高さだったのだろう。どの家にも庭の奥のつきあたりに壁があり、それが一続きに連なって通り全体の長さになっていたから、当然相当な長さになっていた。この通りはアベニューと呼ばれていたが、通りの一方—うちからはずっと離れていた通りの端—が行き止まりになっていたからだ。短い通りで片側に26軒の家が並び、その向かい側にも26軒の家があった。うちは48番地で、あと4軒行けば、本通りのラネラ街道になる。ラネラ街道ではトラムやバス、それにあらゆる種類の車が走っていて、とても騒々しかった。

家の裏庭の壁の向こうには、広いテニスクラブがあった。夏には時折—特にトーナメントが行われる時期に—妹と私はよく二階の裏窓に腰かけ、白いテニスウェアを着た選手たちを見、審判の人がスコアを告げる声を聞いたものだった。クラブハウスもあったのだが、そこからは見えなかった。大きなガレージの建物がうちの壁にくっつくように立っていたし、我が家とラネラ街道の間に4軒の庭もあったから、視界が少しさえぎられていたのだ。この通りの多くの住民は車をそのガレージにあずけていて、テニスクラブに来る人たちもそこに自動車をとめていた。車の出入りがやがやしていたから私はガレージには行ったことがない。でも、併設のお店では食品や雑貨を買っていた。店の正面はラネラ街道側にあった。店もガレージも、ひょろっとした赤ら顔のマックローリーさんと、太ったピンク色の髪をした奥さんが経営していた。夏の日午後、妹と一緒に小さい紙カップ入りの黄色いシャーベットを買いに行くと、テニスクラブの人も何人かいて、アイスクリームやレモネードで一休みしていた。

ある夏の日の早朝、まだ暗い時刻に、私は寝室のドアの外でひどく興奮している父の声を聞いた。8歳くらいの頃だったと思う。妹も私と同じ部屋で寝ていた。「マックローリーのところが火事だ!」と、父は言っていた。自分の寝室の窓に映る真っ赤な炎で目を覚ましたのだ。父は服をひっかけると何が起きているのか、急いで見に行った。母は裏の窓から妹と私に火が燃えているのを見せてくれた。私たちがよくテニスの試合を見ていたあの窓からだ。思わず見入ってしまうようなものすごい火事だった。飛び散る火の粉にぼうぼうと立ちのぼる煙、そして、絶え間なく物が壊れていくすさまじい音がしていたが、まもなくそれは屋根の一部が崩れ落ちるドシャンという轟音で破られた。母は、火の手が回らないうちにガレージから自動車を出せたのか心配していた。こうして私たちは皆、燃えさかる炎が大きなピカピカの車をなめつくしていくのを想像しながら、新たな関心と、とてつもない畏怖の念を抱いて燃えていくガレージを見つめた。興奮でゾクゾクした。やがて母は表の寝室に戻るよう、妹と私を急き立てた。でも、そこでも高ぶった気持ちはおさまらない。通りでは男の人が互いに呼び合い、玄関のドアをバンと閉めて、火

事を一目見ようと走って行った。この頃までに母は我が家には危険が及ばないと見ていたので、私たちをベッドに戻してしっかりと毛布でくるんだ。だけど、私はとても眠ることなどできなかった。それで、明るくなってきたらすぐに身支度をして小走りで階段を下りていった。父には話すことがいっぱいあった。ガレージは全滅だと父は言った。でも、お店は無事だ。たくさんの車がだめになった。火事がなぜ起こったのかは誰にもわからない。ガレージの関係者の中にはたいそう勇敢な人も何人かいて、火の中に飛び込んでできるだけ多くの車を救った。うちの庭を見下ろしていたガレージの一部は黒く焦げ、崩れそうで、ガランとしていた。屋根もほとんどなくなってしまい、中には何も残っていなかったのだ。焦げついた臭いが充満していた。

私は音もたてずにふらりと通りに出て行った。通りは^{ひと}人けがなかった。遊ぼうと外に出ている子供もいなかったし、大人が仕事に行くにはまだ時刻が早すぎた。私は袋小路になっている方に歩いて行った。そこに住んでいる人たちはガレージから離れているので、昨夜の火事で眠りを妨げられることもなかった。友だちの男の子のお母さんが、牛乳を取りに戸口に出てきた。

「マックローリーさんのガレージが夕べ焼けたの！」私は叫んだ。

「何の話？」ひどくぎょっとして、おばさんは言った。

「全部焼けたの」私は言った。「壁一つ残っていないの。車もたくさん焼けちゃったみたい」

おばさんは肩越しに振り返って、台所の方に目をやった。通りの家は皆同じ造りになっていた。この家の台所はうちと同じ位置にあった。「ジム！」おばさんは叫んだ。「あんた、聞いた？マックローリーさんのガレージが夕べ焼けたんだって。全焼らしいよ。材木一本残らなかったってさ……そんな時に、うちはすっかり寝てたんだからねえ」後半の言葉は私に言った。火事の最中にぐっすり寝ていたと考えただけで、おばさんは戸惑い、動揺しているようだった。

ここでおじさんが家の奥からさっと出ておばさんの隣に来たから、私はまた一から火事の話を書き返すことになった。そして、おじさんがマックローリーのガレージにひとつ走り行って見て来ようと言ったので、私は頭にきてしまった。だって、私は火事があったところには行ってはいけなと言われていたし、おじさんが帰ってきたら、私よりも火事のことをよく知っているってことになってしまう。でも、そんなことをぐずぐず考えている時間はない。他の家の人たちも表のドアを開け始めており、私は自分で皆に火事のニュースを知らせてやりたかったのだ。

「知ってますか？」できるだけ多くの人に聞いてもらおうと私は叫んだ。もちろん、いったん耳を傾けると、皆は私の話を夢中で聞いてくれた。中には人を寄せつけないようなすぐく不機嫌な顔で、私の横をささーと通って仕事に急ぐ男の人も一人か二人いて、怖くて話しかけられなかったが。こういう人たちは何も知らないままラネラ街道の方へ歩いて行くけれど、トラムやバスに乗るころまでには、どこかのお節介なおしゃべりが私のとおきおきのニュースを伝えてしまうだろう—そう思うとものすごく悔しかった。それから、別の女の人が—この時から私はこの人に親しみをを感じるようになるのだが—私を表の寝室の窓から呼び止めた。「ピアスの奥さんに何を話していたの？」秘密の話をするみたいにささやき声だったが、言っていることははっきりとわかった。

「ああ、マックローリーさんのガレージが夜焼けちゃったってこと。車も大体みんな焼けちゃって。ほとんど何にも残ってないってパパは言うの」この時にはもう私は同じことをしゃべるのに飽きて、ひどくそっけない口調になっていた。

「えー、本当なの？」この女の人は嬉しそうな顔をした。そして、次に私が気づいた時には玄関

先に来てドアを開けていた。このニュースを誰よりも知りたがっていたのだ。

しかし、私の栄光はそう長くは続かなかった。よその子供たちが外に出てきて一中には、火事の現場に行って焼け跡を見てもいいよと親に言われた子もいたので—ほどなくあの火事は私だけのとっておきのニュースではなくなってしまった。そのへんを歩いている人で、私よりも状況を知っている人が増えてきたからだ。私は火事にはもう興味ないから、というふりをしてみたが、誰かに—父ではないが—ガレージの車からとれたねじれた真っ黒いブリキをひと塊もらったときは、やはり嬉しかった。

テニスのクラブハウスは火事の影響を受けず、午後になるとまた選手たちがやってきた。あの人たちは、火がくすぶっているガレージの庭や黒焦げの車がたくさん並んでいる中をそろそろと通ってコートに來たけれど、そんなものは自分たちには全く関係ないといわんばかりに、雪のように真っ白なウェアに身を包み、華やかでカンペキだった。トーナメントが近づいてきたので、ステージにペンキを塗っている人がいた。審判が坐ったり、大きな帽子と花柄の薄いシフォンのドレスをまとった女性が勝者にトロフィーやメダルを授与したりする場所だ。いよいよ、日差しを浴びながら選手たちはラケットを振り上げ、プレーを始めた。彼らの熱のこもった格調高い喚声が、めっちゃくちゃになった暗いガレージで作業をする男たちのしわがれたわめき声と混じり合った。妹と私は二階の窓から眺めていたが、ラケットにポーン、ポーンとリズムカルにボールが当たる音が大火事の残骸から聞こえてくる様々な音と重なるのが想像できた。それは、あの火事から立ち直れずに建物が屈していく時のうめき声や金切り声だったのかもしれない。

まもなくマックローリーさんは新しいガレージを建てた。波形になった銀色の金属製で、うちの庭の壁を背にギラギラとけばけばしく見えた。おまけに前のガレージ以上に視界を遮った。この新しいガレージはすごくがっしりしていて長持ちしそうで、鍋やかんと同じように燃えることもなさそうだった。二階の窓から眺めたあの美しい緑のテニスコートは、以前は古い木造のガレージの方に向かって心地よくなだらかに広がっているように見えた。それが今やくると背を向けて反対の方向へ遠く伸びているみたいだった。あたかも、新しくできた醜いガレージが好きになれず、関わりをもつのはゴメンだとでもいうように。

父は、あそこがまた火事になるなんてことはまずないだろうと言ったけれど、私はあの晴れた薄暗い朝のことを、あの時のゾクゾクした興奮と、皆に注目された喜びとともに思い出した。そして、あんな火事がまた起きますようにと願った。実際今度は父よりも早くみつつけてやろうと意気込んで、火事の兆しはないかとできるだけ気をつけてガレージを見ていたが、期待は叶わなかった。ガレージはなくならなかったし、数年後に我が家が引っ越すときも相変わらず醜い姿で立っていた。それでも、長いこと私は思っていたのだ。もしどこかの子供が、ある晩マッチ一本持ってガレージをこそこそとうろつき、また火事を起こしたとしても、私が一番にそのニュースを皆に教えてあげられるのなら、その子のことは絶対に責めないって。

テキスト：Maeve Brennan, "The Morning after the Big Fire." *The Springs of Affection: Stories of Dublin*. Berkeley: Counterpoint, 1998. 15-20.